

Title	ベトナム語における所謂『-iěc化現象』について
Author(s)	富田, 健次
Citation	大阪外国語大学学報. 59 p.63-p.73
Issue Date	1982-11-08
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80920">https://hdl.handle.net/11094/80920</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ベトナム語における所謂『-iêc 化現象』について

タイ・ベトナム語学科

富田 健 次

## On the phenomenon, so called, “-iêc-ization” in Vietnamese

Vietnamese is a type of mono-syllabic language. We know that in this type of language, people make it a principle to give a name to a thing or a notion by only one syllable. But in modern Vietnamese, as well as in other Sino-Tibetan languages which are classified as the same type as Vietnamese, there has been a marked tendency that they like to use two or four syllables to call a thing or a notion, though it is not known when they started it.

The very curious phenomenon, so called “-iêc-ization” in Vietnamese is also one of those phenomena. But it occurs only in conversation and it is very momentary and non-conventional. So most Vietnamese linguists have paid little attention to the problem.

This essay will attempt to describe and analyze this strange linguistic phenomenon in Vietnamese.

1. はじめに
2. 『-iêc 化現象』とは
3. 『-iêc 化現象』の意味内容
4. その他, 『-iêc 化現象』に代わる表現
5. おわりに

### 1. はじめに

ベトナム語は、単音節・孤立語型の言語である。このような類型に属する言語では、ひとつの物あるいはひとつの概念に対して、それぞれ一音節の単語で命名がなされるのが原則である。日本語で、「手」という物にテという一音節で応じ、「歯」にハ、「毛」にケ、「目」にメという一音節で応じる現象を更に一層徹底させたようなものである。これは、中国語やタイ語などを含むシナ・チベット語族と呼ばれる言語グループに共通した特徴でもある。

ところが、これを何時からと確定することは出来ないが、ベトナム語でも、他のシナ・チベット語族に属する各言語と同様に、複音節語つまり二つ以上の音節を好んで用いようとする傾向が次第に顕著になっているのである。中国語については、現在、既に「ふつうの談話における単音

節語と複音節語との比率は、ほぼ半々であるという<sup>(1)</sup>」くらいの比率になっており、可成りな程度に複音節化が進行していることは事実である。ベトナム語については統計資料がないので今は何とも言えないが、中国語からの複音節文化語彙の借用もあり、中国語ほどではないにしろ、やはり複音節化は顕著であると言える。

ベトナム語の系統論は、現在でも依然解決困難な問題のひとつではあるが、ベトナムが中国による長い直接的支配下にあったために、ベトナム語が中国語の多大な影響を蒙ったことは自明の事実であり、非難を恐れずに言えば、もし中国語の影響がなかったならば今日のように美しく繊練されたベトナム語は存在し得なかったかも知れない。なぜなら、ベトナム語は音節の構造も、文法の構造も必要以上に中国語に類似しているために、その影響は実に直截にベトナム語の本質を撃ち、同化の勢いも、他の漢字文化圏の国々の言葉、例えば朝鮮語や日本語などより遙かに強烈なものがあつたに違いないのである。こうして、中国語の言わば“ふところ”の中で育まれたベトナム語が、必要以上にリズムを重んじる、非常にリズムカルで、抑揚に豊んだ声調言語の面目を保っているのは、ある意味では当然のことであると言えよう。本家の北方中国語が徐々にアルタイ語化されて<sup>(2)</sup>、本来のリズムカルな特徴を少しく失って行ったのに対し、その言わば“落とし子”であるベトナム語は、かたくなな迄にその特徴を守り抜いているとも言える。ベトナム語における複音節化の道も、中国語におけるそれと正に不即不離の關係にあり、この影響を抜きにしては語ることができない所以である。

ところが、このように中国語の影響下に複雑な様相を呈するベトナム語における複音節化の中で、極めてベトナム語的な一現象が存在する。それは、『iêc 化現象』と呼ばれる音声現象である。この現象による複音節表現は、極めて俗的な表現で、公式な文法書にも辞書にも全く取り上げられることはなかったし<sup>(3)</sup>、勿論、このような現象についての論究も皆無である。つまり、この現象は、ベトナム人にとっては、口語における一過的な、ある感情のみを表出する極めて特殊な発声と受け取られているのである。

私事で恐縮であるが、筆者がこの問題を取り上げてみようとした時、日本に来ている若いベトナム人留学生達は極めて好意的にこちらの要求に応じてくれたのであるが、本学に客員として教鞭をとっているベトナム人国語学者は、実に嫌な顔をして、これは、他の表現（恐らく、公式的で正統な表現のことであろう）で言い替えることができるし、またそうしなければならないのだから、こんな問題をこと更に取り上げることはない、キッパリ宣言したものだった。つまり、若いベトナム人達にとってはこのような俗的なしかも生々とした表現に対して全く拒絶反応がないのに対し、規範意識の強い国語学者達にとっては忌むべき表現として議論の対象にすることすら避けられているのである。しかし、ベトナム語でも言語のことを“生語”<sup>シングー</sup>と呼ぶように、言語は生きた言葉であり、言語学者・国語学者はその生きた言葉を記述し、分析する義務を負っていることは自明のことである。どんな小さな現象であれ、それがあつた言語の中で“生きている”限りはやはり記述・分析の対象となるはずであり、またならねばならないのである。その意味では、

ベトナム人言語学者・国語学者達の、これらの現象に対する姿勢には、多少の疑問を抱かないわけにはいかない。

本稿では、ベトナム語における極めて複雑な複音節化の過程の中で、最もベトナム語的と思われる『-iēc 化現象』を正面から取り上げて、その形式・内容両面にわたって記述し、分析を試みてもよいと思う。

## 2. 『-iēc 化現象』とは

『-iēc 化現象』というのは、例えば一音節の語を例にとれば、その韻母（声母即ち語頭子音を除いた部分）をそっくり -iēc という韻に置き換えて、元の語幹の後に連続させ二音節にして発声する現象である。もう少し分かり易く説明すると、もしこの語がAという声母とXという韻母から成り立っているものとし、-iēc 化を受けた後の韻母を X' とすると、この現象によって成立する音形は以下ようになる。

$$A \cdot X \rightarrow A \cdot X \quad A \cdot X'$$

具体的な例としてベトナム語の〈帽子〉という単語を取れば、『-iēc 化』後の音形は以下になる。

$$mũ \rightarrow mũ \quad miēc$$

また、〈ペン〉であれば以下ようになる。

$$bút \rightarrow bút \quad biēc$$

つまり、元の単語の韻の形や声調に全く無頓着に、それを iēc という韻に変えてしまい、元の語幹に接続させて二音節語として発する現象なのである。

これだけを見ると、中国語音韻論で言う『双声語』の構造によく似ていると言えよう。つまり、声母のみをそろえて繰り返す言い方である。中国語では、擬態語などに「流利」(líuli ) 〈スラスラ〉や「参差」(cēn ci ) 〈ギザギザ〉のようなものが数多く見られるし<sup>(4)</sup>、ベトナム語でもこの種の『双声語』は数多く見られる。思いつくままに若干の例を挙げると、

- ① xa xôi 〈遠い〉
- ② gần gũi 〈近い, 親しい〉
- ③ mĩa mai 〈皮肉る〉
- ④ nghĩ ngợi 〈思案する〉
- ⑤ long lanh 〈きらきら光る〉
- ⑥ rộng rãi 〈広い〉
- ⑦ đất đai 〈土地, 国土〉

これらはすべて典型的な『双声語』の例で、第二音節は全く無意味な付加であり、語頭子音（声母）を揃えて繰り返すのみで、韻母の選択にはほとんど法則らしいものは存在しない。唯、この『双声語』はリズムを整えるものであるだけに、その声調の選択には極めて厳密な法則がある<sup>65)</sup>。ベトナム語の声調は、『陰』（高い声調）、『陽』（低い声調）の二系列に分かれる。図解すると以下ようになる。ベトナム語の声調は中国語の『四声』のように番号で呼ばれることはなく、ベトナム語独特の呼び名で習慣的に呼ばれている。（ ）内は正書法に採用されている声調記号であり、これが主母音の上・下に付されて声調の区別を表している。

	平	仄	
陰	1. ngang (記号ゼロ)	3. hỏi (?)	5. sắc (/)
陽	2. huyền (\)	4. ngã (~)	6. nặng (.)

これを上の『双声語』の諸例の声調の選択に当てはめて見ると、その組み合わせは以下になる。

- ① 1—1      ② 2—4      ③ 3—1      ④ 4—6      ⑤ 5—5  
⑥ 6—4      ⑦ 5—1

つまり、語幹の声調が陰声である場合には無意味に付加される音節の声調は陰声が選ばれ（奇数声調の組み合わせ）、一方、語幹の声調が陽声である場合には陽声が選ばれている（偶数声調の組み合わせ）ことが分かる。つまり、『双声語』の構成に際しては、選ばれる韻(母)の種類は極めて恣意的であるにも拘らず、声調の選択に関しては可成り厳密な法則に従っているのである。そして、こうして成立した『双声語』は発話の中で繰り返し使用されているうちに習慣化し、正規の語彙として辞書にも登録されるようになったのである<sup>66)</sup>。

こうして見ると、『-iêc 化現象』においても、語幹に無意味な音節を付加するという点では、上のような『双声語』の構造と何ら変わることはないのである。唯、異なるのは、『双声語』の場合、語幹に付加される音節は、その語幹に個有の、固定した音節であり、辞書に登録されるまでに慣用化されているのに対し、『-iêc 化現象』は、ベトナム語のほぼすべての語彙及び熟語に適用される可能性を秘め、しかも一過的で慣用化されることは全くなく、そのため、勿論、辞書にも登録されることはないのである。しかも、その声調の選択にも法則は存在せず、語幹の声調が陰声であろうが陽声であろうが、すべて陰声に属する -iêc のみで応じているのである<sup>67)</sup>。また、その意味内容も、『双声語』が、単音節語語幹の、言わば“聞こえ”の短さを助け、意味の明確化に貢献しているのに比べ、この『-iêc 化現象』によって付加される音節には、後章で詳しく分析するように、極めて特異な意味内容が含まれているのである。そのことが『双声語』との距離を遠ざけていると思われるのである。

さて、上のような『-iêc 化現象』は、上で例示したような単音節の語彙にのみ起こる現象ではない。二音節以上の語彙にも、更には、動詞句などの慣用句にも起こる。例えば、〈コーヒー〉を意味する二音節語彙を例にとれば、

cà-phê + -iêc 化 → cà-phê cà-phiêc

と言う具合に、語幹となる語彙（又は句）の最後の音節に『-iêc 化』が起こり、こうして成立した“亜語幹”とでも呼ぶべきものが、元の語幹に接続して発せられるのである。これをやや公式的に示してみると、

- ① 一音節語    A + -iêc 化        → A・A'
- ② 二音節語    AB + -iêc 化       → AB・AB'
- ③ 三音節語    ABC + -iêc 化       → ABC・ABC'
- ④ 四音節語    ABCD + -iêc 化       → ABCD・ABCD'

.....

このように、音節の多少に拘らず、語(句)の最後の音節に『-iêc 化』が起こり、こうして成立した“亜語幹”が語幹に続いて繰り返されるのである。今、これをそれぞれ具体的な例で示してみよう。

- ① mũ            〈帽子〉        → mũ miêc
- ② cà-phê        〈コーヒー〉    → cà-phê cà-phiêc
- ③ a-pa-tít       〈燐灰石〉      → a-pa-tít a-pa-tiêc
- ④ pê-ni-xi-lin   〈ペニシリン〉 → pê-ni-xi-lin pê-ni-xi-liêc

.....

### 3. 『-iêc 化現象』の意味内容

『-iêc 化現象』は、上で述べた通り、あくまで談話上の一口調として起こる現象であり、極めて一過的性格の強いものであり、そのため、勿論、書き言葉としての文章には用いられることはない。では、では、このような一過的に談話上の口調として起こる『-iêc 化現象』には一体どのような意味、どのような働きがあるのであろうか。以下に、2～3人のベトナム人インフォーマントの協力によって得られた例文を示しつつ、その意味内容を考察してみよう。

#### A 一音節の名詞 + -iêc 化

- 1) Ghế ghiêc gì mà ngồi không được<sup>(9)</sup>! 「何という椅子だ。とても坐れやしない」
- 2) Báo biêc gì mà viết toàn chuyện bậy<sup>(9)</sup>! 「何という新聞だ。出鱈目な話ばかり書きお  
て」
- 3) Bảng biêc gì mà chán quá<sup>(10)</sup>! 「何という黒板だ。うんざりだ」

- 4) Bánh biếc gì mà chả ngon tí nào<sup>(11)</sup>! 「何てパンだ. 少しもうまくない」
- 5) Mũ miếc gì mà trông như cái nồi vậy! 「何て帽子だ. まるで鍋だ」
- 6) Thôi, đừng chè chiếc gì cho phiền ra<sup>(12)</sup>! 「いやお構いなく. お茶など結構ですよ」

#### B 二音節の名詞+-iếc 化

- 1) Tôi không (uống) cà-phê cà-phiếc gì cả<sup>(13)</sup>! 「私, コーヒーなど飲みたくありません」
- 2) Học sinh học siếc gì mà đến chậm thế<sup>(14)</sup>! 「何て学生だ. 学生のくせにこんなに遅刻して」
- 3) Thầy giáo thầy giếc gì mà lười thế<sup>(15)</sup>! 「何て先生だ. 先生のくせにあんなに怠けて」
- 4) Ti-vi ti-viếc gì mà chừa suốt ngày<sup>(16)</sup>! 「何てテレビだ. 修理に丸一日もかかりやがった」
- 5) Đền sách đèn siếc gì, chán quá<sup>(17)</sup>! 「勉強なんてうんざりだ」

#### C 三音節以上の名詞+-iếc 化

- 1) A-pa-tít a-pa-tiếc gì mà bón ruộng chẳng ra sao! 「磷灰石など田圃にまいたところで, どうなるものじゃない」
- 2) Pê-ni-xi-lin pê-ni-xi-liếc gì, uống mà không khỏi! 「ペニシリンなど飲んだところで, 治るものじゃない」

#### D 動詞句+-iếc 化

- 1) Tôi không mua bán mua biếc gì cả<sup>(18)</sup>! 「私は商売なんかやりません」
- 2) Tôi không đọc báo đọc biếc gì cả<sup>(19)</sup>! 「私は新聞など読みはしません」
- 3) Vội quá tôi cũng chẳng kịp ăn cơm ăn kiếc gì cả<sup>(20)</sup>! 「どんなに急いでも食事するひまなどありません」
- 4) Anh đeo kính đeo kiếc gì, trông mà xấu thế<sup>(21)</sup>! 「君が眼鏡なんかかけると醜いね」

#### E 形容詞+-iếc 化

- 1) Nước này trong triếc gì mà thế<sup>(22)</sup>! 「この水がきれいだって」
- 2) Đồng hồ này mới miếc gì mà như thế<sup>(23)</sup>! 「この時計が新しいだって」
- 3) Hoa kia đẹp điếc gì mà mua! 「あの花がきれいだって. あんなもの買えるものか」

以上の例で分かるように、『-iếc 化現象』は, 圧倒的に多く名詞語幹に起こるようであるが, 動詞句や形容詞にも起こることがあり, 品詞の制限は余りないと言えよう. また, 語幹の音節の数についても, ほとんど制約はないと言えよう.

更に, この現象の意味内容は, 上の条列文から直ちに明らかになるように, 多くは, 対象(行為そのものも含めて)に対する発話者の不平・不満の表明であるということである. また, ある対象が当然そうあるべき姿・状態ではないことに気付いた発話者の驚き・不満の表白であると同時に, そのような対象を忌避したいという意思の表明でもある. また更に, 例えばA-6のように,

お茶（を出すこと）が相手の手を煩わすものであり、この場面では、発話者として忌避すべきものであるという認識に立って発せられる場合もある。また、D-3のように、食事などはほんの短い時間があれば済まされるという認識があるにも拘らず、それすら果たせなかったということにする不満を表明する場合もある。更に、Eの各例文は、ある対象に関する評価に対して等しく異議をとなえ、不満を表明したものであろう。

こうして見ると、『-iêc 化現象』は、発話者が、ある対象、ある行為、或いは、ある対象に関する評価に対して、負（マイナス）の感情を抱いた時に起こると言えよう。しかも、そうした感情を極めてストレートに表明するものであり、それだけに、余り行儀のよい表現とは言えず、規範意識の強い国語学者などにとっては、むしろ忌避すべき表現と考えられているのであろう。

#### 4. その他、『-iêc 化現象』に代わる表現

##### 1) -áo 化現象

『-iêc 化』とほぼ同じ意味内容を持つ現象で、異なるのは、唯、-iêc の部分が -áo という韻になるだけである。但し、この現象は、『-iêc 化』ほど普遍的なものではなく、インフォーマントからは唯一つ、〈コーヒー〉という語についてのみしか聞き取ることができなかった。

cà-phê cà-pháo 〈コーヒー〉

##### 2) -ung 化現象

先に引用した Hồ Lê という言語学者が、以下の二語を -iêc 化の語と並べて記録している。但し、氏はその意味内容については何の言及もしていない<sup>(25)</sup>。

cà-phe cà-phung 〈コーヒー〉

しかし、筆者が協力を仰いだベトナム人インフォーマント達（北部出身者・南部出身者を含む）は、誰一人この形は耳にしたことがないと言う。

##### 3) 音節毎の繰り返し現象

主として二音節語に起こるようであるが、例えば AB という二つの音節を持った語幹があるとすると、AABB という具合に、各音節をそれぞれ二度ずつ繰り返すのである。つまり、同じ音節を繰り返すことによって対象に対する不満を表明するわけである。聞く方も、何度も同じ音節を耳にしてうんざりするという効果があると言う。

① Cà cà phê phê gì đấy, đi học đi! 「コーヒーなんかいいから、勉強しなさい」

② Tại sao tôi phải lo cơm cơm áo áo mãi như thế<sup>(26)</sup>! 「どうして私はこんなにいつも米や着物のことばかり心配しなければならんのだ」

③ Tiền tiền bạc bạc mãi, lo học đi<sup>(27)</sup>! 「お金のことなんかいいから、勉強のことを考えなさい」



#### 4) 音節分離現象

やはり主として二音節語に起こる現象であるが、例えば、AB という二つの音節を持った語幹があるとすると、Aという音節とBという音節の間に、với (<…と、…と共に>) という、元来、語と語を連結する機能を有する接続詞を置いて、AとBの各音節を分離することによって、やはり、対象に対する不満を表現するという面白い現象である。これも、ベトナム人の会話においては極めて普遍的な現象で、特に若い世代の人々が好んで用いる表現のようである。

- ① Tổng với thống gì mà như vậy<sup>(28)</sup>! 「大統領のくせに、そんな風かい」
- ② Vội quá tôi cũng chẳng kịp cơm với cháo gì cả<sup>(29)</sup>! 「どんなに急いでも、食事などする暇ないよ」
- ③ Đi với đứng thế à! 「一体、どこ見て歩いてやがる」

③の例は、動詞複合語に起こった例であり、ベトナム人インフォーマントによると、歩いている時にぶつかって来た相手に対する言わば“捨てぜりふ”であると言う。

また、一度『-iéc 化現象』を起こした後に、更に、この分離現象が起こる場合もある。

- ④ Quê với kiểc gì xa lắm<sup>(31)</sup>! 「田舎だって、遠いよ」
- ⑤ Tôi không có thì giờ mà đọc báo với biểc gì! 「僕、新聞など読んでる時間なんてないよ」
- ⑥ Không có tiền mà học với hiểc gì<sup>(32)</sup>! 「学問する金なんてないよ」

#### 5) 『双声語』による表現

既に述べたように、ベトナム語には、語頭子音（声母）のみ一致させた無意味な音節が付加されて成立した『双声語』が無数に存在する。これは各語幹に習慣的に付加される音節によって成立し、付加される音節の形にはほとんど法則性はないものの、今では既に固定したものであり、そのすべてが辞書にも登録されているものである。これを用いた表現は、行儀のよい、礼儀にかなったものと見做され、国語学者達の言わば“おすすめ”の表現であるが、会話の中における表現の新鮮さにはやはりやや欠けているようである。しかも、『-iéc』化の表現が、負（マイナス）の感情のみをストレートに吐露するのに対して、この『双声語』は、そのような正・負の感情には、普通、中立（ニュートラル）であり、もっぱらこのような感情は文脈に依存するのである。

- ① Hai bên đường chẳng có cây cối gì cả<sup>(33)</sup>! 「道の両側には木なんて一本もない」
- ② Người ngợm gì, trông như ma ấy<sup>(34)</sup>! 「何て人間だ。まるでおばけだ」
- ③ Thuốc thang gì, uống mà không khỏi<sup>(35)</sup>! 「薬なんて、飲んだところで治りやしない」
- ④ Câu chuyện ấy có hay ho gì mà nhắc lại<sup>(36)</sup>! 「そんな話、思い出すのもバカバカしい」

#### 6) 複合語による表現

それぞれ単独で独立した意味を担う語が複合して、2～4音節の熟語になった複合語によって

表現する方法もある。これも、5)の『双声語』と同様、やはり感情表白にはやや劣るものの、ベトナム語における最も普遍的な表現の一つである。

- ① Thịt cá gì đâu nhé<sup>(37)</sup>! 「ごちそうなど結構ですよ。お構いなく」
- ② Tôi không đọc báo đọc chí gì cả<sup>(38)</sup>! 「私は新聞や雑誌なんか読みはしません」
- ③ Tại sao tôi phải lo cơm áo gạo tiền mãi như thế<sup>(39)</sup>! 「どうして、私は、しょっちゅう、食べ物や着るもののことを心配しなければならんのだ」
- ④ Chẳng còn đầu óc nào nghĩ đến gia đình nữa<sup>(40)</sup>! 「もう家族のことを考える頭などない」
- ⑤ Giày dép đâu mà không đi<sup>(41)</sup>! 「満足に履ける履き物なんて一足もない」

## 5. おわりに

ベトナム語における『-iếc 化現象』は、これまで見て来たように、感情を極めてストレートに表白する手段として用いられる一言語現象である。

感情を余りにも直截に表現するために、ベトナム人にとっては、これを言語規範の中に含めることに若干のためらいがあり、出来れば共通の言語財としての存在を認定しないでいたいという欲求が感じられる。しかし、一方では、ベトナム人の談話にある種の新鮮さを加味することも事実であり、特に、規範意識の薄い青年層はほとんど何のためらいもなくこの表現を使用する傾向がある。その点では、この現象は、まだ、言わば“階層語”としての域を脱していないとも言える。

私達ベトナム語教育に従事する者にとっては、このような現象の取り扱いには苦慮するところであるが、大方の国語学者の反対にも拘らず、現実の言語現象として、やはり、記述・分析し、紹介する必要があるのではないかと思います。筆をとってみました。

ベトナム人インフォーマントの一人がいみじくも言ったように、「このような表現が自然に使えたらベトナム人」である。私達は、ベトナム語の深奥に迫るためにも、隠された様々な言語現象に目を向けなければならないのである。

大方の読者賢者の御叱正と御批判を賜ることができれば幸甚である。

(1982.6.13 脱稿)

### 〔注〕

- (1) 中国語学研究会編『中国語学事典』(江南書院・1958) p. 4
- (2) 中国語のアルタイ語化説については、橋本萬太郎『言語類型地理編』(弘文堂・1978)を参照。
- (3) 以下の二書に、この現象についての若干の説明が見られるが、純粹に音韻論的説明のみで、その意味分析、機能については何の解説もない。

Nguyễn Tài Căn Ngữ pháp tiếng Việt Tập I, Trường đại học Tổng hợp Hà-nội Khoa Ngữ văn-

Ngành ngôn ngữ, 1970 pp. 8~10, Hồ Lê Vấn đề cấu tạo từ của tiếng Việt hiện đại Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, 1976 p. 368

- (4) 前掲『中国語学事典』p. 62  
 (5) ベトナム語の声調の体系及び『双声語』の韻の選択に関する法則性については、三根谷徹「安南語の聲調の體系について」(『金田一博士古稀記念, 言語・民俗論註』1953 pp. 1017-1040) 参照。  
 (6) 『双声語』の他にも、『疊韻語』『繰り返し語(疊語)』なども同様に、ほとんどは上の法則に従う。  
 (7) Trần Trọng Kim, Phạm Duy Khiêm, Bùi Kỳ Việt-Nam Văn-Phạm Lê-Thăng xuất bản Hanoi, 1940 pp. 156~157 によれば、会話中のみの現象として、という註記とともに、以下のような各語が掲げられている。

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| ① đen điếc <黒い> | ② chén chiếc <茶:> |
| ③ vở viết <ノート> | ④ mũ miếc <帽子>    |
| ⑤ đèn điếc <電燈> | ⑥ nụ niếc <つぼみ>   |

もし、この『-iếc 化現象』にも、『双声語』形成の音韻法則が適用されるとするならば、陽声一陰声の組み合わせである④は明らかにおかしく、④も⑤⑥同様 -iếc 韻ではなく -iếc の韻を取るべきであろう。しかし、このことは、逆に、『-iếc 化現象』には、最早、『双声語』『疊韻論』に厳密に適用される声調選択の法則が有効に作用していないことを雄弁に物語っているとも言え、しかも、私が協力を求めたベトナム人インフォーマントは口を揃えて、⑤⑥の形は普通ではないと断言した。或いは、国語学者の規範意識が作用したのかも知れない。また、前掲 Hồ Lê 1976 p. 368 にも、語幹の陽声に合わせた -iếc という韻が記録されている。

- |                                |
|--------------------------------|
| ① học trò học triệc <生徒>       |
| ② thầy đồ thầy điếc <(寺子屋の)先生> |

これらの形もインフォーマント達によると余り一般的なものとは言えないようである。ある南部出身のインフォーマントの証言によると、このような低い陽声調の連続は、何となく中部地方(フエを中心とする)の方言を連想させるのだと言う。これは外来語の借用についても言えることで、例えば、フランス語から<ネクタイ>(cravate)を取り入れる際、北・南部では、普通、cavat という具合に陰声一陰声の連続で応じるのに対し、中部では cà-vạt という具合に陽声一陽声の連続として取り入れる傾向があるからであると言う。もし、これが正しいとすると、上に紹介した言語学者 Hồ Lê が中部出身であり、Trần Trọng Kim も中部より: Hà Tĩnh 省の出身であるということもあり、案外、方言的な現象として処理することが可能かも知れない。いずれにしろ、『-iếc 化現象』には、『双声語』などの形成に強く働いた声調選択の法則は、最早、有効性をほとんど失ってしまっていると言えよう。

- (8) ghế <椅子>  
 (9) báo <新聞>  
 (10) bảng <黒板>  
 (11) bánh <パン>  
 (12) chè <お茶>. この場合、chè chiếc は全体として<お茶を出す>という動詞として機能している。  
 (13) この場合も、( ) 内の<飲む>という動詞を欠くこともあり、その時には、cà-phe cà-phiếc は<コーヒーを飲む>という動詞として機能している。  
 (14) học sinh <学生>  
 (15) thầy giáo <先生>  
 (16) ti-vi <テレビ>  
 (17) đèn sách <勉強(元義は、電燈と本)>  
 (18) mua bán <商売する(元義は、買うと売る)>  
 (19) đọc báo <新聞を読む>

- (20) ăn cơm <御飯を食べる, 食事する>
- (21) đeo kính <眼鏡を掛ける>
- (22) trong <澄んでいる>
- (23) mới <新しい>
- (24) đẹp <美しい>
- (25) 前掲 Hồ Lê 1976 p. 368
- (26) cơm áo <衣食 (元義は, 食と衣)>
- (27) tiền bạc <お金>. この場合は動詞的に用いられている.
- (28) tổng thống <大統領>
- (29) cơm cháo <食事 (元義は, 飯と粥)>
- (30) đi đứng <歩く (元義は, 歩くと立つ)>
- (31) quê <田舎>. 『-iēc 化』後は quê kiểc.
- (32) học <勉強する>. 『-iēc 化』後は học hiếc.
- (33) cây cối <樹木>
- (34) người ngợm <人間 (この語にはある種の悪意が込められている)>
- (35) thuốc thang <薬>
- (36) hay ho <面白い (この語にはある種の皮肉が込められている)>
- (37) thịt cá <肉や魚> 転じて <ごちそう>
- (38) đọc báo đọc chí <新聞や雑誌を読む>      báo chí <新聞, 雑誌類>
- (39) cơm áo gạo tiền <飯・衣・米・金つまり, 人生に必要な諸々の物>
- (40) đầu óc <頭脳, 精神>
- (41) giày dép <履き物 (元義は, 靴とサンダル)>